

<実践報告>

附属長野小学校2003年度卒業生の総合学習に関する事例研究
 —6年間の総合学習によって「身についた力」—

青木真由子 箕輪町立箕輪南小学校
 土井 進 信州大学教育学部教育科学講座

A Case Study on Integrated Learning for Graduates of Shinshu University's
 Attached Nagano Elementary School

AOKI Mayuko : Minowa Minami Elementary School, MinowaTown

DOI Susumu : Educational Science, Faculty of Education, Shinshu University

研究の目的	6年間にわたって総合学習を実施している信州大学教育学部附属長野小学校の児童にはどのような力が身についているのかを事例研究によって明らかにする。
キーワード	附属長野小学校 総合学習 ヤギの飼育活動
実践の内容	附属長野小学校2003年度6年2組の児童を対象に、6年間にわたる総合学習を振り返る授業を3回行なった。そして、児童がどのような活動を通してどのような力を身につけたのかを明らかにしたいと考えた。
実践者名	第一著者と同じ
対象者	附属長野小学校6年2組39名(2003年度)
実践期間	2004年2月24日, 2月26日, 3月15日
実践研究の方法と経過	2月24日には6年間にわたる総合学習を振り返って、心に「最初に思い出す場面」を語り合った。そして、今も大事に家にしまっているものを2月26日に持参して教室に展示し、相互に見合うことによって、総合学習の振り返りをさらに一層深めた。そして、3月15日には総合学習を通して児童が身についたと思う「力」について記述させた。
実践から得られた知見・提言	最も心に残っている場面は、3年生から5年生の終わりまで飼育したヤギとの生活であることが明らかになった。ヤギの出産の場面に立会い、生命の尊さ、生きると言うことの尊さを心に深く学んでいることが明らかになった。

1. 本稿の課題—附属長野小学校における総合学習テーマの分類と事例研究—

2002年度より総合的な学習の時間が実施されている。しかし、総合的な学習の時間に対する批判や不安の声は大きい。有馬(2002)は、総合学習がきわめて成功すればこのままでよいが、その効果あまり見られないようであれば、総合学習の時間を週2時間に減らしてはどうかということを提案している。また、小島(2002)は、総合的な学習の時間のテーマ設定が、「はじめに子どもありき」を誤解して、見かけだけの楽しさを追い求める遊び、お祭り、パーティなどになってしまうことを危惧している。そして、2005年1月18日、文部科学省は、ゆとり教育を掲げる新学習指導要領の目玉である「総合的な学習の時間」の在り方を見直す検討を始めた。中山成彬元文部科学大臣は同日、子どもの学力低下に関連し、総合学習により国語や算数などの基礎的教科を重視すべきだとの考えを示した。こうして総合的な学習の時間は、終戦直後にアメリカから直輸入した経験主義教育の失敗の轍を今再び踏もうとしていることが危惧される。

このような教育界の時流に流されることなく、信州大学教育学部附属長野小学校においては、総合学習が一貫して実施されてきている。同校において淀川茂重が「研究学級」と称する総合学習の実践を創始したのは大正6年(1917)のことであった。それ以来彼の「児童の教育は、児童にたちかへり児童によって児童のうちに建設されなければならない」(淀川, 1947a)という教育精神が附属長野小学校の伝統的な教育方針となって90年近くになる。彼は木下竹次、樋口勘次郎と並んで総合学習の3大源流の1人とされている。

附属長野小学校の実践は、1989年度より実施された生活科や2002年度より実施された総合的な学習の時間など、現在の教育に求められている体験的学習を重視した教育理念に重なるところが多い。そこで、筆者は附属長野小学校における総合学習で取り上げられている体験的学習のテーマを分析することによって、その特質を明らかにするとともに、6年2組の6年間にわたる総合学習によって、児童はどのような学びをし、どのような力を身につけたのかを明らかにしたいと考えた。

2. 淀川茂重の「研究学級」を源流とする附属長野小学校の総合学習

淀川は大正6年(1917)より6年間にわたって受け持った「研究学級」において、鶏飼育と米栽培を実践している。そして、この実践について淀川(1947b)は「郊外」のなかで次のように述べている。「児童生活の対象となるものに潤沢なる郊外こそは、児童の生活する場所として、いとも、ふさわしいものであると考えられてくるのであります。(中略)同じ場所でも、ふかく暮らしていけば、それで十分であろうと思います。(中略)去年蛙の卵をかえしたものが、また、今年もやってみようとすることは、決して、単なる繰り返してはしないと存じます。」

また、淀川(1947c)は「研究学級の実情」においても、「わたくしどもは野外へでてるにしても同じことをくりかえします。時を異にしても訪れますし、季をひとしようして二年も三年訪れます。」と述べている。更に彼は「六年を顧みて」(淀川, 1947d)の中で、「なんと

言っても、雛の一羽がおおきくなるだけでも、そこにそそがれるなさはあまりに深く広いものであって、とてもはかり知れたものではないということでした。そして、雛の発育を見たときに、ついでに、わたしたちの発育を見るようにして来ていたわたしたちは、わたしたちも、こうして毎日学校へ来て遊んだり勉強したり面白くくらししているものの、いったい、まあ、どのくらいのおかげをこうむっていることであろうかと、そんなことを話し合うようになったのであります。」と述べている。

このように徹底して動物や植物との関わりの中から学習を展開していくのが淀川(1947a.b.c.d)の教育精神であった。彼は「再び六年間を顧みて」(淀川, 1947e)のなかで次のように述べている。「雛を飼うとする、雛舎を立てる、どこへどんなふうを立てるか、地勢を考えたり気候を考えたりすることがそこから生まれる。手工が生まれる。飼育をくわだてる、そこに他人の経験を聴いたり読書したりすることが生まれる。出来ごとを記録して他人に伝えようとする所に綴方が生まれる。孵化を待ち雛舎をととのえ飼料をそなえるところに数字が生まれる。餌は・水は・発育はと考えると理科の仕事が生まれる。卵に値段を決めるにも地理のことも経済のことを考えなくてはならない。ものを言わないものに愛情を寄せ、あいはかって飼育を経営してゆく、そこに修身の仕事は生まれてくる。」

附属長野小学校の研究指導にあたった重松(1979)は『総合学習の展開』の中で、「連続的追究活動としての学習、感動がもとになって生まれた活動は、次々と新たな活動を生み出し、学習の主体である子どもによって継続されていく。こうした活動の連続は、単なる行為のつながりではなく子どもたちの内面における価値の連続であり、子どもたちの意識によって連続されていくのである。(中略)このように、子どもによって連続されていく活動を連続的追究活動と呼んでいるが、この連続的追究活動の中で子どもたちの題材への親愛感はいっそう深まり、それが追究のエネルギーとなって学習を深めていくのである。」と述べている。

また、牛山(1989)は「実践者・淀川茂重の問いかけるもの—『研究学級』から『生活科』へ—」のなかで、「飼う生活を軸とするとき、『飼う』ということがもつさまざまな局面が学ばれる。それによって飼う生活が支えられ、いっそう更新されたりする。逆にいえば、飼う生活を支え、よりよいものとするために多面が学ばれ、そこに教科や科学の論理が生まれ、引き寄せられたりする。つまり、飼う生活において必要なことは、所与の教科の内容ではなく、『飼う』ということの如実な理解なのだということになる。」と述べている。

「研究学級」は満州事変後、教育内容への統制が強まる中、昭和12年(1937)3月で幕を閉じた。その後昭和15年からの国民学校のもとで低学年における総合授業が作り出され、息を吹き返した。昭和20年代から30年代にかけては、主として遊びを学習にどう生かすかの研究がなされ、昭和30年以後は、遊びの中でも「ごっこ」に焦点を当てた研究がなされた。そして、昭和48年度(1973)には、低学年全学級での総合学習が全面的に実施され、昭和50年度(1975)からは低学年のみならず、中・高学年においても総合学習が全面的に実

施されることになった。

3. 附属長野小学校における総合学習のテーマの分類

附属長野小学校における総合的学習の授業実践記録として編集されているのが『子どもがつづる学習の記録』である。この冊子は、昭和51年度(1976)より、現在に至るまで1年ごと刊行されており、附属長野小学校における1クラスごとの1年間の学習が子どもたちの声によってつづられている。この資料には、同校の総合学習が生き生きとした形で詰まっている。そこで、筆者は総合学習のテーマ設定に見られる伝統を明らかにするために、『子どもがつづる学習の記録』(1976年～2003年)(第1集～第24集)を資料として分類することにした。

1976年～2003年までの附属長野小学校の497クラスを、1クラスずつ次の10項目に分けて分類した。①国語②社会③算数④理科(植物栽培)⑤理科(動物飼育)⑥理科(その他)⑦音楽⑧図画工作⑨体育⑩その他 497クラス分の分類結果は、図1の通りであった。結果は図1・図2・図3のとおりであった。

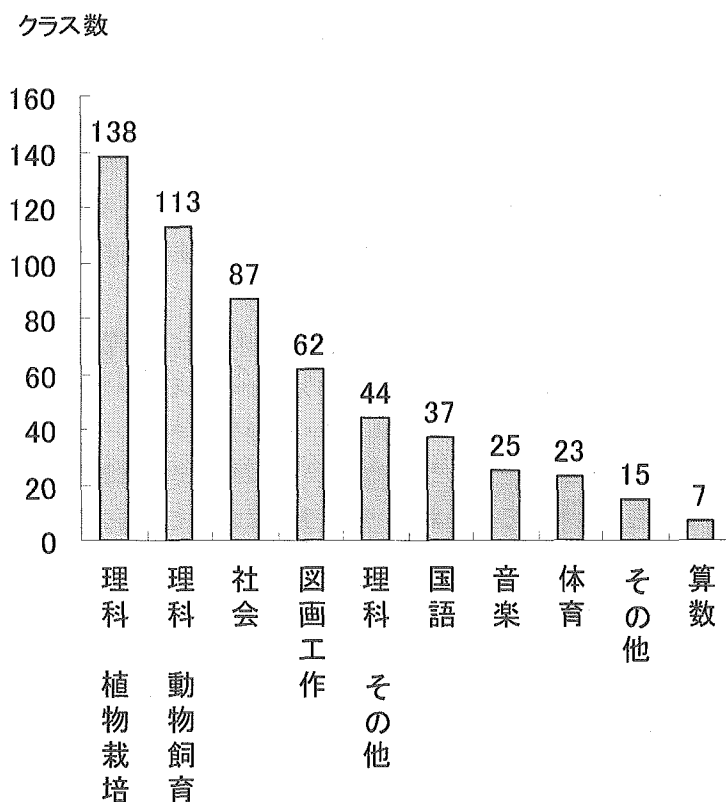


図1 全クラステーマ分析

クラス数

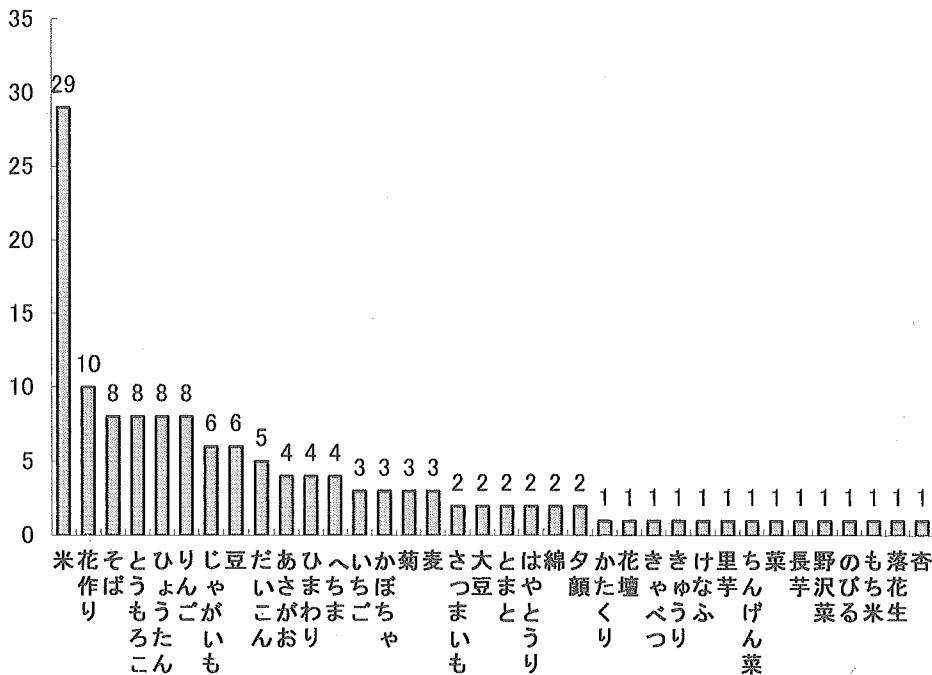


図2 理科（植物栽培）をテーマにしたクラス

クラス数

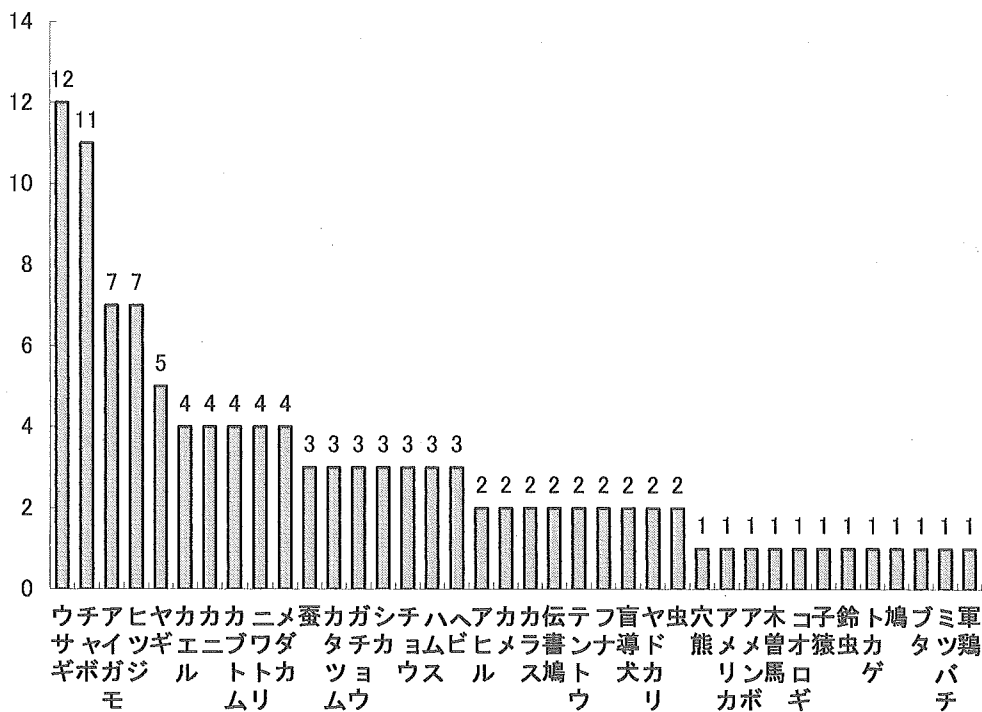


図3 理科（動物飼育）をテーマにしたクラス

4. 6年間の総合学習の振り返り

附属長野小学校においては6年間にわたって総合学習が実践されているが、このような体験的学習重視の教育が果たして児童にどのような力をつけているのだろうか。このことを明らかにするために、6年2組39名の児童を対象に3回にわたって授業を実践した。

4.1 第1回目の授業 平成16年(2004)2月24日

この日は6年間にわたる総合学習を思い出す手がかりになるように、黒板に次のような活動に関わる絵を描いた教材を貼った。

1年 ヤドカリ

2年 七夕祭り おしし お月見会

3年 ヤギ(ジャッキー) 野菜づくり

4年 ヤギ(メイ) みそづくり 第1回附小デパート

5年 ヤギ(メイ) お米づくり 第2回附小デパート

6年 リコーダー 第3回附小デパート

この授業のねらいは6年間の総合学習を振り返ることによって、どのような活動や体験が児童の心に残っているのか、どのような学びをしているのかを明らかにすることであった。そこで6年間の活動の流れを確認させた。子どもたちは学年ごとの総合学習の活動内容やテーマ設定のきっかけを鮮明に覚えていた。そして、3年次にヤギのジャッキーを飼育したことから総合学習の広がり生まれ、6年生まで繋がっていることを再確認している子どもたちの姿があった。そのような姿には自分たちが行ってきた活動を誇りに思っている自信と逞しさが伝わり、どんな活動だったかを教えてあげたいという優しさも強く伝わってきた。

こうして6年間にわたる総合学習の振り返りの話し合いを終えた後、質問紙(A4版1枚)を配り、1番心に残っていることを記述してもらうことにした。その結果、圧倒的に多かったのはヤギのジャッキー(34名)とメイ(24名)であった。例えば次のような記述が見られた。

「僕の心に残っている場面は、ジャッキーの死とメイの誕生です。ジャッキーの死というのは、ジャッキーは死んでまでメイを産んでくれて、僕たちに命の大切さを教えてくれた。」
「大切なものをなくすってこんな気持ちなんだな。ジャッキーもミコトが死んだときこんな気持ちだったのか?と思いました。」

子どもたちは、ヤギを飼うことによって「命の大切さ」「命のつながり」という大きなテーマを抱え、動物の誕生・死・日常の世話・資金・動物実験に使われる事実などに向かい合った。そして、深く強い思いとして筆者に伝わってきた。

淀川(1947c)は「研究学級の実情」の中で「おおいなるもの前に立って自分の貧しさをつくづくと感じるとき、すべてはみこころのままにとみずからの小ささを捧げるとき、そのときにこそ、そのひとに潤いと力が湧いてくるのではありますまいか」と述べている。子どもたちがヤギの飼育を通して学んだことは淀川(1947c)が指摘していることに通ずる

のではなかろうか。

4.2 第2回目の授業 平成16年(2004)2月26日

第2回目の授業において筆者は、子どもたちが家に大事にしまっている思い出の作品をもって来るように指示し、それを学年別に分けて教室に展示した。総合学習を通して学んだ大切な品々がたくさん展示されたので、子どもたちばかりでなく保護者の方々や先生方も大変興味深く鑑賞され、教室中が6年間の思い出に包まれる状況であった。保護者の方々は子どもの成長に改めて感銘を深くされているようであった。

2年生の運動会で使ったおししなどは、とても大きい作品で、抱きかかえるようにして学校へ持ってきた姿は印象的であった。ヤドカリの貝やおししの人形、メイのご飯、メイの毛など臨場感あふれる作品が多かった。ヤギの飼育の際に食べさせてはいけないものを調べた資料や、みんなで歌詞を考えた「天国にいるジャッキーにおくる歌」の楽譜などの貴重な作品も見られた。これらの作品から子どもたちの総合学習に寄せる強い想いが伝わってきた。児童の内から構成された学習は、このような形ある作品として子どもたちの心の中に生きているのである。

2回目の授業ではお互いに思い出の作品を鑑賞したあと、6年間の総合学習を学年別に振り返ることにした。筆者は1年生から6年生まで6枚の模造紙を黒板に貼り、子どもたちには一人に6種類の紙を配布した。そして、子どもたちには思い出した事柄から順に自由に記述させ、学年別の模造紙に貼るように指示した。

1年生では「ヤドカリの飼育」(16人)が一番多かった。「毎日がヤドカリとの生活でした。」「1年生のころはもうそれはヤドカリ命！で授業なんてろくに聞かないで机の上にいつもヤドカリを置いていました。」のような記述が見られた。

2年生ではおしし(運動会・音楽会)(19人)が一番多かった。「ダンボールでおししを作って運動会のときにおどった！小さいおししも作った。」「おしし、おししばっかりの毎日の授業が大好きでした。」という記述が見られた。

3年生では「小屋作り」(13人)が一番多かった。「ジャッキーは最初小さい小屋に入っていたんだけど、かわいそうだしこれから大きくなるということで小屋をつくりました。木材を切ったり大変だったけど、がんばってやっとこさできました。それからジャッキーとの生活が始まりました。」

4年生ではヤギのジャッキーの出産、第1回附小デパートを開くなど、ヤギとの関わりの中で学習が進み、「ジャッキーの出産」(22人)が一番多かった。「ジャッキーはメイを産んだ。でも、その夜ジャッキーは天国に行ってしまった。命がけでメイを産んでくれた。私たちの願いをかなえてくれたジャッキー」「ジャッキーの出産がありました。5月16日にミコトを引っぱり出してもらいました。ジャッキーの悲痛な鳴き声を聞いて、とても苦しかったです。」などの記述が見られた。

5年生で最も多かったのは「メイとの別れ」(25人)であった。「メイとのお別れがありました。すっごく悲しかったけど、人のためになろうとしているメイを束縛しちゃういけな

いなと思いました。今はどうしているのかなあ。」「メイが車に乗って行ってしまうところは忘れられません。」「竹前さんから手紙がきてメイを返してほしいという内容でした。みんなで話し合ったすえメイを返しました。これがぼくたちにできる最後のことだと思いました。」「トラックに乗ったメイを追いかけて走った。メイちゃんありがとう。」2年間毎日一緒に過ごしてきたメイとの別れは、子どもたちにとって大きな出来事であった。

5年生では「お米づくり」(15人)が2番目に多かったが、米づくりをとおして次のような学びを記述した児童があった。「一年間毎日のように畑に行きました。休みの日にも水をやりに行きました。毎年お米をつくっている人の気持ちが分かりました。」「1年間かけて作ったお米づくり。お米を附小デパートで売るために作っていくことと同時にスーパーへ消費者が求めるお米を調査したり、地域で作っているお米の品種を調査したりした。メイのためにみんなでがんばった。楽しかったし、みんなでやりとげられてとってもよかった。」

6年生では附小デパート(9人)が多かった。「第3回附小デパートをやることになったけど、やる意味は？ってことも考えて、共同作業所の方々と交流したいとみんなで考えて第3回をやることになりました。目玉はリコーダー演奏で思い出になりました。」「当日たくさんの人が来てくれてとてもうれしかった。」

4.3 第3回目の授業 平成16年(2004)3月15日

卒業を前にした6年2組の児童39名に、附属長野小学校での6年間の総合学習を振り返り、「いつ、どのような場面で、どのような力がついたのだろう」という用紙を配布し、子どもたち自身に「身についた力」を判断させることにした。教科ごとの欄を設けた用紙と教科にあてはまらないと思うことを書く用紙の2枚を一人に配布した。

教科の欄に記述されたことも総合学習と密接にかかわっていることが伺われる。例えば国語では「第3回附小デパートの時に手紙を書いたとき、ていねい語がわかった。漢字も書けるものは書いた。」社会では「地域の方々と関わったり、体の不自由な方とふれ合うことができて、とてもいい経験になったと思う。」、算数では「田んぼの面積を調べるときに小数のかけ算がわかった。」などがある。理科では「米の成長を観察できた。」、音楽では「音楽会のためにヤドカリのうたをつくった。」、「天国にいるジャッキーにおくる歌をつくった。」、図画工作では「ジャッキーの小屋作りで、木の切り方やくぎの打ち方が勉強できた。」など、活動をしている中で必要にせまられ学んでいる内容が多くある。

総合学習による学びを記入する欄では、39人中30人がヤギのジャッキーとメイから学んだことを記述していた。例をあげると次のようであった。「ジャッキーの出産で、新しい命が生まれるのに、どれだけ大変かがよく分かったし、動物を飼うことがどれだけ大変かがわかって一生に残るとてもいい経験になりました。」「ジャッキーを飼っていて死んでしまったとき、命の大切さを思う力がついたと思う。」「私は小学校生活でなによりも自分に力がついた学習はヤギだと思っています。」

ヤギとの生活において身につけた力は、多くの児童にとって自信を持たせている。第3回目の授業において、児童はジャッキーが来た日付、亡くなった日付、メイを返した日

付を全員が即答できるほどに内なる心に深い学びをしていることに筆者は感動すると共に驚きを禁じ得なかった。また、記述の内容が具体的なものが多く、その時の自分自身の気持ちに戻れる力が身につけていることがわかった。子どもたちはヤギの散歩や餌当番を必死で行なった。その活動や体験を通して間違いなく「生き物を育てる力」や「みんなで支え合う力」「思いやる力」を身につけていると考えられるのである。このような考察は北村(1988)が「淀川茂重と研究学級の総合学習」において述べている次のような記述と軌を一にするものといつてよからう。

「論議しつつ協力するなかで協調性と集団としてのまとまりが生まれ、金銭を取扱い、生命に携わる緊張感から『責任』思いが培われる。生物にかかわって生命の意味に触れないわけにはいかない。否応なく訪れる誕生と死に直面して小さな生命を慈しみ、畏敬する心が育つ。」「鶏の生存の全面にかかわり、鶏を自分たちの仲間とみなすようになった児童にとって鶏の発育はそのまま自分たちの発育と二重写しになる。ここが生物にかかわる総合学習の尊さであり、真骨頂と言うべきところだろう。生かされてある自分たちの生存のありようを比較・類推し、そこに注がれる『なさけ』の深さ、大きさに改めて驚くのであった。」

6年2組の児童の実践は、まさに淀川茂重の研究学級の実践と重なるところが多いだろう。

4.4 総合学習に対する保護者の受け止め

2月26日に6年2組39名の保護者にアンケート用紙を配り、①総合学習の良さ②総合学習への不安・疑問③総合学習への願い・提案について記述を求めたところ18名から回答があった。

「総合学習の良さ」としては次のような記述があった。「附小における総合学習は子どもが子どもらしく本来持っている計り知れない可能性を引き出していくことのできる学習だということを、知るほどにすごい教育だと日々感じております。」「ヤギとの日々は子どもにとっても強く命はすべてのものとの関わりとして学んだようです。また命=自分自身として気持ちを正直に表現することを身につけたように思います。優しさだけでは足りず、自分勝手は自分自身が辛くなり、相手を思いやることは自分を思うことにつながったようです。(中略)附小での学びが大きくなっても変わることなく自分自身を高めることに続いていることは上の子どもたちを見て感じます。」

総合学習への不安・疑問としては「他の学習とのバランスが悪い。基礎的な学習(読み書き計算)がおろそかになることが懸念される。」などの指摘が見られた。総合学習への願い・提案には「今の総合学習に基礎学力を取り入れたものにしてほしい。」という回答があった。

総合学習を行なう上で大切なのは、常に各教科に結び付けて学習していこうとする教師側の実践力であると思う。活動に浸ることも大切だが、偏りがあると、児童が基礎学力を身につける機会を失ってしまう。教師は常にアンテナを高くし、基礎学力を身につける機会をとらえていく必要があると考える。

5. 本稿のまとめ

附属長野小学校における総合学習は淀川茂重の「研究学級」を淵源として90年あまりにわたって伝統的に実践されている。総合学習のテーマとしては動物飼育や植物栽培が多く取り上げられている。そして、動物や植物の命にかかわることから生まれた感動をもとにした連続的の追究活動が展開されている。

文献

- 有馬朗人, 2002年, 「小学校の『総合』の時間は多すぎる」, pp.186~193
- 牛山栄世, 1989年, 「実践者・淀川茂重の問いかけるもの—「研究学級」から「生活科」へ—」, 信濃教育出版部『生活科への道』, pp.197~198
- 北村和夫, 1988年, 「淀川茂重と研究学級の総合学習」, 信濃教育出版部『生活科への道』, pp.184~185
- 小島宏, 2002年, 「『総合的な学習の時間』で発展的な学習にどう取り組むか」, 教職研修, 5月号, pp.38~41
- 重松鷹泰, 1979年, 信州大学教育学部附属長野小学校『総合学習の展開』, 明治図書出版, p.32
- 淀川茂重, 1947a年, 「途上」, 信濃教育会出版部『生活科への道』1989, p.13
- 淀川茂重, 1947b年, 「郊外」, 同上, p.70, p.85
- 淀川茂重, 1947c年, 「研究学級の実情」, 同上, p.97, p.100
- 淀川茂重, 1947d年, 「六年を顧みて」, 同上, p.127
- 淀川茂重, 1947e年, 「再び六年を顧みて」, 同上, p.148

(2007年6月30日 受付)